

特277

888

特277-888



家革新思想の諸体系 編纂に當りて

國家革新思想は今や澎湃として拍頭して居る。民間は勿論、軍部にも官像の内部にも、將本政党内の内部からも上つてゐる。戦慄すべき乎、戦慄すべき乎、之こそ我日本の當面する最大問題である。然し乍ら國家革新思想は其の系統に於て、本々の依つて立つ努力に於て幾多の様相を呈し、雜然として居りその明確なる把握は仲々困難事に屬する。而して其の発展の段階に於て離合集散を繰返へず。此の事は明治維新を見ても明白である。されば現在に於て相対立する系統も或る機運に遭遇するや果然合流し、夫配階級に肉迫するに至る。是れは革新思想は辨証法的把握を必要とする。本書は之等に就て詳細なる批判、解剖、紹介を爲したるものである。然し乍ら此の編纂は仲々困難事であり、相當の資料と人手を必要とするため、先づ其の一部分を発表し、青年懇談会に提出し、併せて一般希望者に頒布する事とした。之によつて世を益する事あらば幸甚である。

昭和十一年三月

青年懇談會・國家革新思想研究會



始



目次

第一章 我國無産政党的發展過程と麻生イズムの地位及其の基調

一、本編の目的

二、我國無産政党的發展過程と麻生イズムの地位及其の基調——二

第二章 麻生イズムの解剖

一、麻生氏の軍部觀

二、麻生氏の議會觀

三、麻生氏の官僚觀

四、麻生氏の現段階觀

— 七
— 二〇
— 二五
— 二八

第一分冊 正誤訂正

| | | |
|---------|---------------|---------------|
| 第一頁 十二行 | たしかにそれは 定に償する | たしかにそれは肯定に償する |
| 第四頁 五行 | よしそれが所謂官僚と | よしそれが所謂新官僚と |
| 附録 (表) | 諸種社会立法の廃止 | 諸種社会立法の確立 |

76W10828



第一章

我國無産政党的發展過程と麻生イズムの地位及其の基調

一、本編の目的

社大党は去る二月の総選挙に於て一躍十八の議席と、五十三万二千の得票を獲得して凱歌を挙げた。之は同党的資本主義打倒の「国内改革の断行」「新勤労議会政治の建設」を中心とする政策に対する支持でもあり、又十数年に亘る無産政治運動の苦闘を戦ひ抜いた闘士に對する人間的信頼でもあつた。

同時に現下の社会状況は同党的躍進に好條件を供へて居た。即ち滿洲事變、五・一五事件以來引続く不安混迷の政治状況、支配機構の分解對立、国民生活の深刻なる窮迫等を中心とする非常時局の動向は「国家革新」といふ事を各人の常識として了つて居たのである。而して国民一般をして何等かの革新、改造を熱望せしめつゝあつたからである。

社大党は今や「昭和新」の主体、擔持たらん事を期して居る。然らば社大党は如何なる指導原理によつて動きつゝあるのであらうか。之を

究明せんとするのが本編の目的である。

社大党の指導的中心は現書記長麻生久氏である。之筆者が麻生イズムを中心
に祖上に上す所以である。

二 我國無産政党的発展過程と麻生イズムの地位 及其の基調

我國無産政党的運動は、單に思想的に見るならば明治年代に於て日本社会党、大
正年代に於て晚民共産党、第一次共産党等の成立を見てゐるのであるが、大衆
的な無産政党的運動は大正十五年に於ける農民労働党を以て嚆矢とする。然し乍
ら其の後の政党的運動は、昭和七年に於ける社会大衆党成立に至るまでは実に慌
しき離合集散の連続であつた。此の六十年は分裂と混乱によつて無産階級運動
全体の上に大いなる損害と誤謬を與へたのであるが、又大いなる教訓と経験を
將來に残したのであつた。昭和六年に入つて滿洲事変起り、ファッシズムの波
が荒く此の岸に打寄せた。而も將來の見透しは之等ファッシズムの強化を思は
せるものあつたので、此の機運に迎合せんとする者続出し、無産ニ党（労大党

社民党）の受けたる被害は甚大なものであつた。

新うした状態は期せずして無産政党的統一機運を促進せしめ、社大党的の成立
を見るに至つた事は周知の事である。従つて社大党は過去十数年に於ける無産
運動の経験の集積でなければならぬ。組織的にも、本思想的にも斯く断定出
来るであらう。

然らば社大党的の指導原理とは何ぞや。それは共産主義でも無ければ社会民主
主義とも云ふべきでない。況んや其の中固でも無いのである。

元來、我國の無産運動は其の勃興期より滿洲事変頃まで其の濃薄の差こそあ
れ多分に直訳的であつたと云へる。即ち共産主義のみ、然らばんば社会民主主義
のみであつた。而してインテリゲンチヤイズムは其の基調となつて居た。之にあ
らざれば無産運動に非ずと見られて来た。

社大党は之等の経験を、滿洲事変以來の急角度を描いて動搖し來つた社会状
勢の中にあつて、日本の現況を、現実の具体的把握による新方針の中に解消せし
めた。共産主義と社会民主主義は廃棄され、所謂麻生イズムが出現した。既に
山川イズムは党の一隅に其の名残を止めて居るに過ぎない。と云ふより二月の

総選挙に於ける加藤勲十、麻生入内閣の対立闘争を契機として、其は既に社大党のものでは無くなつた。社大党の新方針、麻生イズムが之を駆逐したのである。山川イズムは此の党内事情に加へてコミンテルン第七回大会を契機とする共産主義運動の轉換を通じて社大党の對立物、彼方の彼岸へ運び去られた。それは山川氏並に其の一党の好むと否とに拘らず——。一方我國社会民主主義の嫡流たる安部氏等は、今や麻生イズムの追隨者に過ぎない。

斯くて麻生氏は社大党に於ける最高指導者となつた。社大党内のみならず、社大党が全無産階級を中心組織である以上彼は全無産運動の最高指導者だと云つても過言でない。

彼は共産主義でも無ければ社会民主主義でもない。嘗つて労働農民党と社民党のいづれにも讃成せず日考党を結成し、所謂中岡派と呼ばれた事もあった。直訳思想盛んなる當時にあつてそれに迎合せず独自の境地を拓いた事に徴しても彼の思想傾向の片鱗をうかがふ事が出来よう。又、彼は高島素之在世當時既にインターナショナルイズムに就ての批判的見解を抱いて居たとも傳へられる。いづれにせよ、麻生氏には昔から國家主義的傾向が強かつた事は事實である。

非常時社会状況は之を強く要求した。社会主義と日本主義との大衆的基礎の上に於ける結合が現状の具体的把握の上に生かされたならこそ社大党最近の勝利が導かれたのである。と同時に麻生イズムはファッシズムであるとの評言も生れるのである。

事実麻生イズムは亦之に指導さるゝ、社大党は愛國無産党への傾向を今後更に強めるであらう。従つて日本主義は、現下の日本主義団体によつては其の非大衆性、浪人的組織の故に之を發展せしめる事能はず、國民的基礎の上に立つ社大党の爲に其の良き部分を擧奪ひされる様な傾向にある。最近の日本主義機關紙は、社大党の×中堅との接觸を指適して、社大党の攪亂こそ日本主義指導者の當面せる任務であると述べて居るが、之など上記の傾向を示すものであらう。之を麻生氏をして語らしめよう。

「茲に革新思想の新しい發展は、徒らに世界性のみを強調して日本の歴史性を無視せる指導精神と徒らに日本の古き歴史性をのみ強調して其世界性を無視せる指導精神とは何れも日本の今日の現実にち當つて其清算せらるべきもの、清算を要求せられて統一せる國家革新の指導精神を生み出さんとする

段階に進み来たのである。即ち統一せらるべき新らしき指導精神の基礎となるべき條件は、ヨーロッパの階級運動の直譯を清算して、其中に日本古来の歴史性を取り入れて其融合統一をはかる事であり、民族的方面より進み来た日本主義は、孤立的な復古的な非経済的精神主義を清算して其中に階級的向題を取り入れて日本主義との融合統一をはかる事である。「解放」昭和十年七月号「国家革新に於ける現在の段階と庶産運動の使命」

第二章 麻生イズムの解剖

一 麻生氏の軍部観

従来、あらゆる団体、資本主義打倒、国家革新を目指す団体は、軍部に対して絶えず深い関心を抱いて来た。此の傾向は特に満洲事変、五・一五以来強まってきた。

麻生氏の對軍認識は如何。

之を先づ麻生氏自身の言葉を以て語らしめよ。

「由來、日本の軍隊は、其建前に於て、没落し行く資本主義と切り離されて、資本主義改革と合流し得る幾多の條件を具備して居る事は私が屢々指適したところである。即ち、其の重要な点は軍部の構成である。第一に日本の軍隊は統帥権がフルジョア権力の手に存せられて下へへに存する事である。第二に日本の軍隊は備兵制度でなくして徴兵制度である事である。第三は軍隊の本隊が殊に資本主義の重圧に苦しむ農民労働者無産市民から成り立つて居ると云ふ事である。日本の軍隊は其の本隊の構成自体の中に反資本主義的

傾向に至るべき本質を有してゐるのである。而も今日に於ては資本主義の存在は國家と民族とを生へす力を失つて、資本主義の存在は國家と民族とを殺す段階に到着し來つたのである。」「解放」昭和十年二月号「事物に対する考へ方と見方」

然し乍ら

「……其の軍隊は單なる外部の宣傳によつて之を動かす事は不可能であるが、社会情勢の变化は其内部に思想的變化を生ぜしむるに至る。其時こそ大膽に勇敢に之を××すべき絶好の機会である……」(前掲書)

而して

「以上の如き諸情勢と諸原因とは、次第に軍部の思想を變化せしめるに至つた。軍部の本職とする民族と國家を守る國防自身より考へ來るも、今日のまゝの社会状態に於ては不可能なる事を痛感せざるを得ざるに至つた。五・一五事件も茲に端を発し資本主義經濟機構を改革すべしとするパンフレットの思想も茲に其原因を有してゐるのである。」

軍部の此一大變化は、既に根本に於て、資本主義戦争反対の我等の建前を

是認し來つたのである。パンフレットの實質は明かに之を認めてゐる。

「(前掲書)——註、上記文中のパンフレットとは昭和九年秋發表の広義國防のパンフレットの

意味——編者曰

即ち麻生氏によれば軍部は五・一五以來反資本主義への動向を示しつつある、而して「之に××を加へて其××を××せしめて行く争ひ」(前掲書)あらねばならぬ。

社大党の対軍工作は故田所輝明氏によつて口火を切られたと云はれてゐるが、其の裏面工作はともかくとして、昭和八、九年頃より麻生氏あたりは対軍工作を重要な日程に上した事は事實である。陸軍省では昭和九年十月十日「國防の本義とその提唱」と題する問題のパンフレットを發表し、政・民兩党並に賊界、貴族院方面をして一大驚愕せしめたのであるが、社大党では當時「社会大衆新聞」紙上に尤の如く發表して之への支持を明かにした。即ち

「其の主張される意見は機關を通じた全軍の總意であり、その態度は某事件の如く從來犯された陰謀的なものではなく合法的なものである事、更に從來の如く非民衆的、独裁的なものでなく、先づ軍部の政策を天下に訴へて民衆

の政策的政治勢力の結集を促し、此の勢力を援助して目的を貫徹せしめんとする民主的態度である。政策に於ても従来の非科學的な臭気無く、科學的態度に発展し、率直に資本主義機構を××し××し××し××ならしめる事を主張して居る。軍部豫算に対しては民衆を生活苦に追ひ込む様な政策が國防の完全にあらざる事及び資本家的戦争が眞の民族的発展に非ざる所以を明かに承認して居るのであつて、資本主義××の社会に於て軍隊と無産階級の合理的結合は必然である。我党は軍部××を支持の立場から在郷軍人、青年団、産業組合等に勇敢に進出し反資本主義勢力の拡大強化を圖らなければならぬ。斯くして社大党は軍接近に一步を進め、昭和十年には平野學氏等の一行が満洲国に関東軍幕僚を訪問し大いに胸襟を開いて共鳴し合つたと傳へられて居る。而して特に故永田鉄山中将等の合法的革新論者との接觸が多かつたとも傳へられて居る。今回の二・二六事件の一派とは対立関係にあつた事は事實である。次に社大党の軍部親に關連して是非明らかにして置くべきは戦争反対の問題である。

前述せる如く我國の無産政党はインターナショナル主義によつて育成されて来たのであり、従つて其の如何なる政党と雖戦争反対を掲げざるものは無かつた。現在に於ても社大党は依然として戦争反対、平和主義を叫ぶ事に變りは無い。然し乍ら其の内容に於て、又之に対する関心の程度に於て著しき相異を示して居ると云へよう。

即ち、之を満洲事変以前と以後とを比較する時、非常なる隔りを発見する。事変以後の社会状況がインターナショナル主義に一大痛棒を與へた事は前述せる如くであるが、之は眞先に其の具体的問題である戦争問題に表はれて来た。即ち、官憲の許すしと否しを問はず帝國主義戦争反対のスローガンを引込め、引込めないにしても遠慮するの態度を採らされた。昭和八年夏、思想界を動搖せしめた佐野學氏等の轉向声明は共產主義者の大轉回として特筆大書すべき事件である。之は共產党一流の階級主義インターナショナル主義に對する反逆でなければならぬ。即ち佐野の同志鍋山貞親氏は昭和九年四月十二日の公判廷に於てコミンテルンの欺戦主義を徹して徹して徹して居る。

「コミンテルンから発せられた此のテーゼは、その発表の動機に於て極めて不可解なものであり、同テーゼが極めて事實に對する認識に乏しく機械的の公

式主義より出でたるものである事は明かな事実で、日本現下の事情よりして有害なものである。」

又、日英、日米戦争の場合に就て曰く

「此の戦争は弱少アジア民族開放の爲めにこそ必要である。即ち現今のアジア諸民族は欧米の資本に抑圧され進退の自由をすら奪はれて了つてゐる。此の桎梏を排除するためにはアジアで最も優秀な我國が躍起する必要がある。」

以上引用した部分的字句の中にも劃期的轉換が示されて居る。共産党内に於てすら既に然り、他の合法無産党の轉身たるや又當然の事であらねばならぬ。

社大党に於ても戦争反対のスピーカーガンは注意深く引下され、専ら之には觸れざるの態度を持した。(之を総選挙に於ける麻生、加藤の政策的対立を見れば明白であらう。此の傾向は左翼並に党内労農派が好んで罵倒するところであつた。

然し乍ら麻生氏は断言する。

「即ち資本主義戦争は、今日に於て國民大衆を犠牲にする事によつて國家を危くし民族の生命を危くする非愛國的戦争である。」(前掲書)

「而も資本主義戦争の重要な震源地はXXである。軍部を資本主義戦争か

ら切り離す事なしには戦争を除去する事が出来ないのは今日自明の事である。我々が資本主義戦争反対を叫ぶ以上、XX部に対する工作は最重要位を占めなければならぬ。」(前掲書)

然るに前に引用せる如く

「軍部の此の一大変化は、既に根本に於て、資本主義戦争反対の我等の建前を是認し來つたのである。パンフレットの實質は明かに之を認めてゐるのである。」

と軍の反資本主義的状態を論じ、次いで

「我等が今日軍部に望んで而も可能なる事は、其國防的立場を棄てさせる事では無い。如何なる場合と雖も戦争を絶対にやる勿れといふ事では無い。國防は不必要なり、軍隊は不要なりと云ふ事ではない。國家と民族とを危殆に導く如き資本主義戦争をなすなかれといふ事である。」(前掲書)

即ち麻生氏の資本主義戦争反対は、國家民族の立場から有害として反対するのであつて此の英コミンタンの敗戦主義、階級主義インターナショナルイズムと尖锐に対立する。之は佐野、鍋山氏等の思想にも通ずるものである。我が國家

民族を生かす戦争には賛成する。而して軍パンフレットは既に麻生氏等の見解と合流するものであると云ふのである。

筆者は更に麻生氏の戦争観を明かにするために九の二章を引用する。

「満洲事変は、たしかに日本の逆襲であるが併し下う、此逆襲は單なる從來の資本主義的逆襲と云ふよりも若干新らしき意義を含んでゐたのである。(中略)即ち満洲事変は五・一五事件と相関して、日本国内に対しては資本主義打倒の國家改革的意義を含み、満洲事変自体に於ては資本主義を排除せる掬取なき王道國家の建設を目標としてなされたのである。此意味に於て、満洲事変は單なる日本の支那に対する資本主義的逆襲に非ずして、そこに將來に對する新らしき意義が含まれてゐた事は争ひ事の出来ぬ事實である。」(「解放」昭和十年十一月号「日支の關係」)

「政米への道随外交を清算したと云ふ事に對する事を意味するのではなくして日本が東洋の先進國として、其実力の指導者として、東洋の被壓迫國を解放して之に人類として生くる道を與へ、此偉大なる使命を遂行する事に依つて人類の進化に向つて貢献する事である。此大理想を遂行する上に於て、若

し戦争が避け得られざる必然であるならば、日本は國力を盡して戦ふべきである。その運前の中にこそ望國としての日本の本質があり、使命があり、真に生くる道が存してゐるのである。」(前掲書)

即ち麻生氏は日本主義と民族主義と社会主義を社大党の政策に統一具現せんとしてゐるのである。去る一月の年度大会に於て決定された「昭和十一年度予算案返上案」は從來無産党の爲した軍事予算反対一兵張りかうでは無く、陸軍パンフレットに示された廣義國防の方針が實現されておなほといふ觀矣から爲され居り、これなど社大党の對軍態度を明示せるもの、一ツであらう。

X X X

二月二十六日空如全天下の耳目を驚動懷慄せしむる事件が勃発した。それは総選挙好調―社大党の春を謳歌する矢先だけに他の何人よりも強い衝撃を受けたのである。

一時は無産政党的前途に名状すべからざる不安を感じさせた。然し乍ら事件は尙も無く鎮圧され、其後に展開し來つた社会状況は、愈々社大党をして有利

なる地位に等いたもの、如く感じさせる。同党は三月二日麻生書記長談として
 尤の如き声明を発表した。

一、過ぐる総選挙に於て我党が躍進的勝利を博した所以は、国民大衆に内在
 する澎湃たる国家革新の氣運に依るものと信ずる。偶々今回の事件に遭つ
 て益々使命の重大なるを痛感する。

二、今回の事件が勃発せるに對しては、その原因の遠く且つ深きを思ひ、輕
 々なる批判を抑制するものであるが、少くとも五・一五事件以來齊藤、岡
 田両内閣が一時の糊塗を念として革新の熱望を蹂躪し來つたことに大なる
 原因ありと信ずる。

三、国家革新の枢軸は、資本主義機構の根幹に斧鉞を加へ、国内改革の断行、
 昭和維新の強行に依つて、政治の旧殻を打破すると共に国民生活を安定し、
 大衆に明日の希望を與へるにありと信ずる。この意味に於て我党は、跋扈
 官僚、軍部、既成政党の如き一部特權階級の合作たる現状維持的舉國政權
 を排し、国民大衆を基座とせる革新的政權の樹立を要求する。

四、我等は三度かゝる不祥事の勃発ならしむるため、国民と共に今回の事

件の責重なる国家的犧牲を活かし、更始一新のために邁進せんことを誓ふ
 ものである。

重ねて我等は党の政綱を天下に明示し、これを即時断行せしめんとするも
 のである。

- 一、重要産業の国营、金融、保險並貿易の國家管理、
- 二、耕作權を確保する土地の國家管理、
- 三、重要農産物の國家統制、
- 四、税制の根本的改革（資本家増税に依る消費税の徹底的輕減）
- 五、國民年金制の制定、
- 六、中小商工業者金融機関の設立、
- 七、農家借金の徹底的整理、
- 八、労働組合法、小作法の制定、
- 九、医療機関の公營、

然らば此の事件が何故に社大党の前途に名状すべからざる不安を與へたか。

- 一、事件は周知の如く「日本改造法案」の着者北一輝並に西田税等の思想系統にあり、従つて反無産党的色彩が濃厚であつたこと
 - 二、最近の社大党に対する認識を以て、之を共産主義又は社会民主主義といふ従来の観念を以て律して居たこと
 - 三、北一輝等の思想が基本的に國民闘争、大衆組織を排撃し、又「議會」否認の思想であり、社大党の組織方針並に議會觀と完全に背馳せること
 - 四、社大党に対する新官僚との接近其他のデマが、此事件背後の右翼団体から飛ばされてゐたこと
 - 五、事件背後に躍る右翼団体は多年無産運動との対立を爲し來つたること
 - 六、社大党自身此の系統を目して対立關係にありしこと
- 等々が擧示さるゝであらう。事件當日渡辺錠太郎が河上丈太郎と誤傳されて面喰つた人達もあつた事は嘘の様で眞実の事である。以上の外社大党を不安に導いたのは「状勢」の誤認であらう。
- 然らば如何なる誤認をしてゐたか？
- 前述せる如く党幹部は此の事件の系統を目して無視に近い見解を持して居た

様に想像される。無視しないにしても右翼団体に対して抱くが如き認識を持つて之を律して居た様である。即ち、其の革新思想を下からのものとして認識せず、其の動向を單に上部に於て、即ち同党從來の接觸面に於てのみ把握せんとする傾向にあつた。

従つて党幹部の認識には未知の世界があつたのだ。此の未知の世界が突如躍動したのである。之はまさに驚愕すべき事件であつたに違ひない。

然らば今後に於ける社大党の動向は如何。

先づ認識の再吟味が行はれるであらう。

然し乍ら党の對軍部觀、工作の基本的方針は變化を見せないのであらう。事件に対しては強く批判的立場を持つて居るであらう。だが、之を通じて而も接觸面の強化を通じて対象部面は拡大される事とならう。

此の項を終るに當つて特に附言して置きたい事は戦争問題と國家革新の連関性の問題である。即ち麻生イズムは先づ國家革新を主張し、大陸政策而して國內革新、即ち戦争を先行せしめんとする理論とは対立するといふ事であつて、此矣状等の推移の上に麻生氏の對軍部觀が如何なる推移を示すかは興味深き問

題であらう。即ち麻生氏は云々。

「日本が欧米の東洋に対する資本主義政策を排撃しロシアと対立して東洋政策を遂行するに必要な條件は、社会主義的建設以外にないのである。資本主義の未清算の上に行はれつゝある対滿政策、対支政策が常にジグザクの予備の上に揺れつゝあるは、之を行つたX々それ自身も亦今日に於て痛感しつゝあるところであつて、国内改革の必要の力説せられつゝある所以である。」
(「解放」昭和十一年一月号「来るべき総選挙と時代の把握」)

三、麻生氏の議會觀

社大党は前述せる如く総選挙に於て「新勤勞議會政治の建設」を中心政策として戦つたが、麻生氏の議會觀を要約すれば左の如くである。

「今や五・一五事件を中心とする國家革新運動の経験の結果は、日本に於けるファツシヨの不可能を立証し、議會を蔑視し、之に反逆した暴力的革新はたとへばX々Xの力を以てしても不可能な事を立証し來つた。如何なる革新も議會を舞台として、之を中心として行はるゝに非ざれば不可能なる事が立證

され來つた。それが故に私は英吉利の如き社会民主主義的方法、即ち議會内部の多数の力に依つての革新が行はるゝと云ふのではない。日本の特殊の事情は議會外勢力にも亦有力なる革新の力が存在する事を否定出來ないが、併し乍ら、其の議會外の革新勢力は議會内の正統なる革新勢力を中心として之を結ぶ事をしには不可能であると云ふのである。而して又、今後に於て議會内に生るゝ正統なる革新勢力も、革新新政権を樹立するためには、議會外の革新勢力と結ぶ事無しには不可能なのである。議會内の正統なる革新勢力とは何であるか、それはとりも直さず社会大衆党である。」(前掲「来るべき総選挙と時代の把握」)

此の革新方法論、議會觀は明かに「五・一六事件並にファツシヨと対立して居る。茲に發展せる社会民主主義を發見する。」

麻生氏は良く英吉利を引例するが、之によると「最も古くして最も新しき」國であると述べて居る。其は英國には形式と實質と相伴ふデモクラシーが存在して居るため、行はるべき革命は議會を通じて成し崩しに行はるゝが故に、議會外の暴力革命の必要なく、ロシアの如き独裁政治は起らない。此矣英國は最

も新しき国だと賞揚して居る。即ち、英國議會はフルゲヨアの政治勢力によつて独占されて居らぬ。保守党がフルゲヨアを代表し、自由党が中産階級を代表し、労働党が無産者を代表し、而も社会の各階級は其の消長に従つて其の代表する政党を議會の上に消長せしめて居るのである。政權も亦此の法則の上に變動を見せて居る。

然らば、我國は如何。議會政治は存任し、普選は実施され、形式的に見るならばデモクラシーは存任して居る。然し乍ら、我國に於ては無産政党の基礎たる労働組合法、小作組合法が存任せず、組合の団体加入を禁止して居る。従つて無産政党進出の基礎となるべき政策的力が奪はれて居り、到底莫大なる選挙費用に堪へられぬ。此外、選挙區の問題、買収、干渉等の事實は實質上デモクラシーが存任して居ない事を示して居る。(此の尚題と選挙肅正の關係に就いては後段を参照されたい)

而して議會は形式上、政友、民政の二大政党が存任して居るが、之はいづれもフルゲヨア、地主の政党であつて、英國の保守、自由、労働党の対立とは本質的に異なるのである。

斯くて麻生氏は断言する。

「日本には形式上のデモクラシー、觀念上のデモクラシーはあるけれ共實質上のデモクラシーは存任しない。日本の從來の議會はフルゲヨア階級の独裁機關に外ならない。換言すれば、議會と普通選挙とを以てデモクラシーの假面を被つたフルゲヨア階級のファッショ政治に外ならぬのである。」(前掲「事物に対する考へ方と見方」)

「五・一五事件は何故勃発したか、(中略)即ち之を簡單に云へば資本主義が行詰つて、そのために日本の社会は今一度明治維新の如き政治的社会的な一大改革を必要とするに至つたに拘らず、政治の中心たる議會は改革さるべき対象物たる資本主義を代弁する政治勢力に依つて独占せられつゝあつた結果、議會そのものも此時代の要求を満足せしむべき能力を喪失せるがためである。資本主義に対する改革勢力たる無産政党が合理的に議會に進出する道が開かれ、無産政党が議會に相当の勢力を有し、議會が資本主義改革の舞台たる能力を承してゐたならば、五・一五事件は惹起せられなかつたであらう。」(前

掲「来るべき總選挙と時代の把握」)

麻生氏の合法的漸進主義は茲に至つて明白である。特に注意すべき是は麻生氏の議會観が此一ヶ年の間に少なからぬ開きを見せてある事である。即ち昭和十年二月号の「解放」に発表された前掲論文によれば

「茲に於て、日本の資本主義改革の道は、人々の好むと好まざるに拘らず、英吉利の如き道を辿らずして、別個の道を辿るべき必然性を有する事を肯せざるを得ないのである。」

と述べ、議會を通じての革新に悲觀的見解を示し、若干の革命性を持つべき事を論じたのであるが、本年一月号の同誌には前掲の如く

「如何なる革新も議會を舞台として、之を中心として行はるゝに非ざれば不可能なる事が立證され來つた。」

と議會行動に対する見方が大分樂觀的に發展して居る事である。此の麻生氏の理論的發展は之亦其間に於ける政治状態の變化が然らしめるものである。

其れは現支配機構の動搖と、選挙肅正を中心とする新官僚政治が之を説明するのである。

三、麻生氏の官僚観

選挙肅正を中心に社大党の新官僚接近策が既に傳へられて居る。之は麻生氏自ら語る所である。然らば如何なる意圖を持つて之への接近、働きかけを爲しつゝあるのか。麻生氏は

「どうも官僚のする事だから大した事はないだらう。と云つた如き漠然たる觀察を下して極めて消極的態度を持したのである。之が従來の我等の陣營の者の物の考へ方である。自己の心中に絶体なる事を描いて、総てそれに當てはまらなければ駄目だと云ひ、物を相對的に段階的に戰略的に見て、その方向に積極的に働きかけて自己の陣營を發展せしめて行く事を知らない。」(前掲「来るべき總選挙と時代の把握」)

と新官僚に働きかける事の基礎的な考へ方を述べ、次いで「然らば官僚の政治的立場は何であるか。それは一時代が次の時代に推移して行く間の橋渡しの過渡的存在がその立場である。彼等は明治維新以後に於て、資本主義が完成するまでの過渡的存在であつた。而して今日資本主義

が崩壊し始めて社会主義時代に入らんとするに當つて、社会主義政権が樹立せられるまでの橋渡しの存在に外ならない。」（前掲書）

然らば其は何故に？ 麻生氏は先づ「凡そ如何なる革新と雖も支配階級の陣営の先駆的分裂崩壊なしに革新が成就するものではない。」といふ観念から五・一五事件によつて資本主義政権の中心たるムルゲヨア政党が致命的打撃を受け、ムルゲヨア政党、軍部、官僚の分断作用が惹起した事は時代が革新期に入った事の證明であると規定し、此の時代推移の大局に対して軍部官僚は不知不識の間に現状打破の歴史的役割、資本主義の自壊作用を遂行しつゝ、ありと説明する。茲に於て麻生氏は其の中心的問題としての選挙肅正を捉へて其の然る所以を述べて居る。

「選挙肅正は何故生れ来つたか、之を行はんとする者の認識された意図は極めて常識的なものであつたかも知れない。併し下ら是を行はんとする者の常識をこゝに齟らした社会的要因は極めて深奥なるものが存するのである。その社会的要因は既成政党に依つて失墜せしめられた議会の信用の回復、換言すれば革新を必要とし来つた日本の国家情勢に対して、その革新的機能を表

失せる議会をして、今一度其機能を獲得せしめんとする社会的欲求即ち之である。国家革新の対照物が資本主義であり、議会の革新的機能喪失の原因がムルゲヨア政党の議会法に存する以上、議会に革新的機能を獲得せしむる方法は、資本主義の反対勢力を議会に選出せしむる事以外にあり得ない。選挙肅正の表看板は極めて常識的な選挙法の法律的嚴守「赤心一票」の如き道徳的掛声にあるにせよ、其奥底に横はるものは反資本主義的革新勢力を議会に進出せしむる事に存するのである。即ち選挙肅正は選挙に対する選挙民を自由の立場に於て、投票を各党の政策の上に行はしむる事にあるのである。（中略）茲に選挙肅正は結論に於て反資本主義的勢力を議会に進出せしむる具体的条件であり、魚産陣営進出の条件となるのである。即ち選挙肅正は実に我等にとつて「大いなる争いのある」所以である。」（前掲書）

即ち現支配機構の分解的情勢の下に於て、新官僚の進出と其の政策は此の情勢に拍車を加へ革新勢力、而も麻生氏の所謂「正統なる革新勢力」の議会進出に、好条件を提示するといふのである。

此の官僚政治の動向が前項末尾の如く麻生氏をして、より議会主義たらしめ

合法的漸進主義を強調せしむるに至つた理由でなければならぬ。

四、麻生氏の現段階観

麻生氏は今や時代の段階は革新期に入り、諸々の諸條件は之に対して深刻なる拍車を加へつゝあると云ふ。

之に就て氏は現下の経済的社会的政治的革新的特徴を花の如く擧げて居る。「先づ第一の特徴は、旧経済組織の行詰りし依る国民の生活関係の根本的変化である。第二は革新的思想の勃興である。第三には支配権力の衰微、分崩即ち崩壊作用の開始である。第四には反対政治勢力の増大と結成とである。」

(前掲「国家革新に於ける現在の段階と無産運動の使命」)

即ち、第一は国民生活の全般的窮乏であり、第二は無産運動の躍進、五・一五事件以来の軍部の革新的傾向、革新的日本主義の抬頭、而して之等が互に現実に即しての新指導精神への発展である。

第三に於て明治維新の史実を引例して左の如く論じて居る。

「それはアルゴリア権力の中に統一せられてスルゴリア権力を強大ならしめ

てゐた外様大名(軍部、官僚)や下層武士階級(下級官吏、軍人並青年分子)が徳川政権(スルゴリア政党内閣)に離反して之に反逆し、従つて徳川政権(アルゴリア政権)を分解し、支配権力を着しく微弱ならしめ來つたからである。」(前掲書)

と同時に麻生氏は之等外様大名各藩内部に於ける、又アルゴリア政党内部に於ける対立に就ても言及して居る。

而して強調する

「今こそ我等の陣営は確乎たる氣魄を以て、新らしく創造し來つた我等の国家革新の指導精神の上に體を大にし胸を擴げて其一切を我等の陣営に獲得すべき秋である。」(前掲書)

X

以上によつて現段階に於ける麻生イズム、社大党の指導精神は明示し得たと信ずる。尚別表を参照せられたい。

昭和十一年三月二十九日稿了

予告!

| | |
|------|--|
| 第一分冊 | 新官僚と其の國家革新思想 (既刊) 第一版賣切、第二版近刊 |
| 第二分冊 | 新興財閥と國家革新思想の關係 (近刊) 右は本編より先に発行すべき所原稿の關係にて遅れ ましたが本月中には発行致します。 |
| 第四分冊 | 統制經濟と國家革新思想 (近刊) |

◎本書は全十冊を以て完結します。 定價 各五四

意注

本書は各冊共会員並に特殊関係方面のみに配布するものであります。従つて発行部数は極めて少数部数なれば再版、その外特殊の場合を除いて再度の求めには応じません。御保存願ひます。尚、正規会員(会費完納)には無料にて配布致します。

終